

(算数科)

**学ぶ楽しさを味わい、意欲的に考える子どもの育成
～算数的活動と習熟活動を充実させ、
自力解決の基礎となる力を身につける指導法の工夫～**

大阪市立八幡屋小学校 研究部

1. はじめに

本校の児童は、学力定着に大きな課題がある。算数科においては、昨年度の「しんだん」の結果が、1年生を除いて、大阪市の平均より4.9～14ポイントも下回っている。

二年前より算数科を研究教科としてきた。試行錯誤の中で、何とか児童の意欲を高め、学力を上げようと実践を重ねてきた。そうした中で、算数の基礎的な力、特に「計算」の力に課題があることが明確になってきた。

港中学校、池島小学校、本校の三校は、以前より小中連携の取り組みを進めている。中学校からも、いわゆる「考える力」以前の計算の力が不十分であることは指摘されていた。端的には、「せめて九九ぐらいは、マスターさせてほしい。」と言われている。

学習面で課題が大きい児童は、まず、授業に取り組む姿勢、「学習規律」が意識できていない。具体的には、姿勢が悪い、授業中、話を聞かず、私語や手遊びをする、忘れ物が多い、などである。学習に興味をもてなかったり、集中が持続しにくかったりする児童には、以上のような共通した課題がある。

このような経過から、本年度も研究教科を算数科とし、昨年までの取り組みをふまえ、上記の主題・副題を設定した。研究を通じて、児童が興味関心をもって取り組めるような課題を工夫し、学習に積極的に取り組む態度や確かな計算の力を身につけることを目指した。全ての児童が少しでも、学習への意欲を高め、自分に自信をもって学習を進めることができるように教職員で共通理解し、研究実践を進めた。

2. 研究の内容

- (1) 問題解決学習を志向した学習課程の設定
- (2) 授業の進め方、時間配分の工夫による習熟練習に取り組む時間の確保
- (3) 学習規律を確立し、学習に臨む態度や姿勢を育成する工夫
- (4) 具体物を使ったり、体験的、作業的な算数的活動に重点的に取り組んだりして、実際に操作する活動の中で、分かる喜びを体感させる指導法の工夫
- (5) 児童の興味・関心をひきつけ、意欲をもって学習できるような導入や課題、題材の工夫
- (6) 日常生活の中で、楽しく算数の世界にふれられる環境の整備
- (7) 「八幡屋計算検定」
- (8) 「八幡屋放課後学習会（YASS）」
- (9) 研究を活性化させる工夫

3. 研究の成果

- 学習規律の徹底を全教員で意識して指導することも3年目になり、大分定着してきた。本年度は、掲示物も作成した。
- 電子黒板、タブレット、プロジェクターなど、ICT機器の活用が広がってきた。

- 百玉そろばん、フラッシュカードなど、いつも決まったパターンで導入活動を行うことにより、児童はスムーズに授業に入ることができた。
- 筆算で計算の過程を口誦する「アルゴリズム」を積極的に取り入れた。
- 各種のカードやプリントの活用により、児童に考える楽しさやできる喜びを感じさせることができた。
- 五段階の学習過程に基づいたノート指導を全校で共通理解した。
- ICT機器の活用やワークシートなどを工夫すること、テンポよく進めるところとじっくり考えるところを計画的に進めること、などにより、習熟に充てる活用の時間を確保することができた。
- 計算検定は、各学年複数回実施した。3学期も継続する。
- 毎週火曜日、放課後学習会を行った。参加児童は、集中して学習に取り組むことができた。
- 本年度も、管理職を含め、全員が授業を公開した。
- 「学校教育アンケート」では、「せんせいはよくわかるようにおしえてくれている。」「先生は教え方にいろいろな工夫をしている。」の質問項目に対して、肯定的な回答をする児童が増える傾向にある。
- 「模擬授業」は、本年度は、低中高学年で一回ずつ行った。「本番の授業より緊張する。」というのが共通した感想であったが、多様な意見やアドバイス、提案が得られ、授業の改善には効果的であった。

4. 今後の課題

- ・「日常生活の中で、楽しく算数の世界にふれられる環境を整える取り組み」が十分ではなかった。算数的な遊具やゲームなどを常備した「算数ルーム」構想があったが、校長戦略予算が配当されず実施できなかった。無理なくできるような取り組みを考えたい。
- ・放課後学習会への取り組みで、一定の効果はあったが、学年相当に迫いついたわけではない。継続的に取り組みを進める必要がある。
- ・高学年になるほど、追いつくことは難しいことを実感した一年であった。低学年のうちに、学年相当の学力を確実に身に着けさせることが大切。
- ・ICT機器を活用した教材やフラッシュカードなどの作成と共有化を進める。
- ・学習規律については、職員間の共通理解と根気強い指導がこれからも必要。
- ・ICT機器の活用は進んできているが、セッティングの手間が大きい。模造紙などをスクリーン代わりに黒板に貼るなどしてきたが、劣化もあり、見にくいこともあった。ハード面での充実が必要。
- ・家庭学習への意識、授業への準備物などに課題のある児童、家庭が少なくない。家庭への啓発が必要。
- ・ノート指導が定着してきているが、高学年になれば、自分なりに工夫したノートになることが望ましい。
- ・習熟練習の時間を意識するあまり、指導者主体で授業を進めてしまうきらいもあった。